
魂（ソウル）に響くジングルベル

ニジカン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂ソウルに響くジングルベル

【Nコード】

N6700P

【作者名】

ニジカン

【あらすじ】

クリスマスイヴの夜、小さな少年まじるの家に突然やってきた人。それは…クリスマス、みなさんにお届けするソウルフルなストーリーだYO！

(前書き)

サンタクロースがテーマのクリスマスらしいお話です。あなたの元にもきつと、こんな素敵なサンタさんがやって来てくれるでしょう。

カチッ

まじるは電気を付けた。

そこには彼の見知らぬ一人の男が立っていた。

その日付は12月24日、その時刻は夜、その男は赤い帽子に赤い服……。

そう、その男の格好は紛れもなく、

B系のファッションだった。

まずはまじるの説明をしよう。

名前は三田まじる。高校二年生である。そう、もう一度言うが、高校二年生である。

しかしその背丈はあまりにも低く、変声期にスルーされたかと思えない声をしており、しかも極度の童顔。そのため初めて彼を見た人の9割は小学生と間違い、残りの1割は幼稚園児か保育園児と間違っ。

まじる自身もそのことに対し強いコンプレックスを持っている。

そして、それをよく弄られていた。

まじるは友達とファミレスにいた。

「なあなあ、クリスマスイヴの夜に男たちだけで一緒に騒ごうかって話あるんだけどさあ、まじるは？」

「いや、悪い。その日はバイトがあるから無理だ。」

「また例のバイトか？」

「ああそっか、毎年恒例の。」

まじるは毎年イヴの夜にケーキ屋でバイトをする。クリスマスケ

ーキの売り子だ。

小さな体でサンタの衣装を身に纏い、せわしい様子で懸命にケーキを売る様はとても愛らしく、毎年ケーキは飛ぶように売れた。その姿をみんな小さなサンタクロースと呼び、今やクリスマススの名物となっていた。

まあ、本人はそんな呼ばれ方をされていることを知らないし、知ったら知ったでもの凄い勢いで怒るだろうが。

まじるがこのバイトを続けている理由は、なぜかケーキの売り上げが伸びていくのが楽しく、さらになぜか給料や待遇が年々良くなっっていくからだ。

「毎年恒例？」

まじるは聞き返した。

『あ、やべ……。』

「あ、えつと・・・ほら、お前毎年のことだからさ。」

ちなみに、まじるの友達たちも当然このことを知っている。そして本人がそれを知ればどうなるのかも知っている。

「まあな。ま、そういうことで俺は無理だ。」

「そつか。残念だなー。」

「お前イヴの夜、ちゃんと早く寝るんだぞ。サンタさんからプレゼント貰えなくなっちゃうからな！」

「俺は子供じゃねえー！」

「あはははははははは。」

「笑うなあ！」

ちなみにこのやり取りも、毎年恒例である。

そして来たるクリスマスイヴ。ケーキはすっかり完売。さすがに疲れたのか家に帰りつくとすぐに明かりを消して床についた。

どれぐらいの時間が経ったのか、或いはそんなに経っていないかったのか、ふと部屋で物音がしているのに気付く。疲れのせいで逆に眠りが浅かったのだ。

寝ぼけ眼で電灯の紐を探り、引つ張ると、そこには20歳ぐらいのB系ファツションの男がいた。

男はまじるの枕元に小包を置く途中だったようだ。その形のまま止まってまじると見つめあっている。

しばらく膠着状態が続き、やがて赤い男の方がゆっくり左手を前に突き出し、フレミングのような形にしながらこう言う。

「俺はサンタだYO！」

そして再びの静寂ののち、まじるは軽く息を吸い、大声で言った。

「そんなサンタがいるかあああああ!!!!!!」

赤い男はポーズを決めながら、

「深夜にそんな大声出したら迷惑だZE！」

と。なぜかもの凄く落ち着いているようだ。対してまじるは近所迷惑とかそれどころじゃない。

「お前！なんでここにいるんだよ！？不法侵入だろ！？ていうかサンタってなんだよ！サンタなめてんのか！？」

「サンタに不法侵入だとか言うなんてナンセンスだYO！」

「サンタであることが不法侵入を正当化する理由になるとでも思ったのか！？どんな言い訳だよ！？バカだろお前！？絶対泥棒だろ！？」

「だから俺はサンタだYO！ほら、これが君にあげるプレゼントだYO！」

「はあ・・・はあ・・・」

立て続けに大声で叫んだせいで軽く息切れを起こすまじる。そして全く動じていない赤い男。まじるは男のその堂々たる態度に若干呆れ始めた。

「まず、まずだ。お前のその格好はどう考えてもサンタじゃないだろ。」

まずアウターにフード付きの赤いダウンジャケット、中からチェゲバラがプリントしてある白いインナーが見える。そして赤と白のニット帽を被り、やたらとダブい赤いボトムスには白いラインがナメに二本入っている。さらに左手にはゴテゴテしたシルバーのスカルのリングを二つつけ、サングラスをし、首からヘッドホンを提げている。

「サンタらしくサンタカラーにコーディネートしたんだYO!」

「サンタならサンタそのものの格好をしるよ!コーディネート止まりで満足すんなよ!」

「あんな格好じゃ俺のビートを表現しきれないんだYO!」

「やかましいわ!ていうかお前絶対B系勘違いしてるだろ!実はあんま詳しくないだろ!」

散々喚き散らした後、まじるは少し冷静になって気付く。

「あれ?ていうかなんでこんなに騒いでんのにうちの親起きてこないんだ?」

「それは俺がこの部屋を外から遮断してるからだYO!」

「あ、そう。じゃあちよつと警察呼ぶから待っつけ。」

冷たくそう言い放って携帯を開くが、圏外。もちろんいつもなら圏外になることなどありえない。

「……。」

これにはさすがに黙るまじる。

「じゃあ俺はこれで失礼するZE!」

「おい待て。」

立ち去ろうとする赤い男の足をガツと掴むまじる。

どしん!

と、こける男。

「な、何するんだYO!さすがに痛いんだZE!」

「犯罪者をみすみす取り逃がす訳には……って。」

まじるは驚愕した。男の体が壁を透過していたからだ。

「ま、まじかよ……。」

「なるほど。まあ、つまりお前は本当にサンタクロースと、そういうことだな。」

「その通りだYO！」

「その語尾、聞いたたびにムカつくからやめろ。あといちいちポーズ決めんのもやめろ。」

まじると男は互いに正座して向かい合い、冷静に話をしていた。

「わかった。一応、一応お前がサンタであると認めよう。」

「でもな、なんで俺のところに来たのかわかっただけ、聞いておこうか？」

「子供にプレゼントを届けるのが俺の仕事だからだYO
ガンッ！」

「俺は子供じゃねえよ！もう高校生だつつうの！」

「嘘をついてると来年からサンタさんが来ないぞ」

ガンッ！

「もうとつくにサンタからは卒業しとる年齢じゃボケ！」

とりあえず、まじるとしてはそこが一番腑に落ちなかったようだ。

「つつかさ、お前サンタとしてなつてないよ。サンタってのはもつと夢のある存在でないとだめだろ。」

まじるは外見こそ子供だが、中身もやっぱり子供である。結構なロマンチストで夢のあることが大好き。だからこういうことには口出しせずにはいられない。実際、男をサンタであると信じたのもその辺りに理由がある。

「俺なんかサンタ歴長いからな。俺のほうがよくばどサンタらしく出来るよ。」

まじるは胸を張って得意げにそう話す。こういうところがまじるの子供っぽさに拍車をかけているということに本人は気付いていない。

「じゃあ折角だから俺と一緒にサンタしないかYO！」

「え、ほんとに!?!」

まじるは明らかに目が輝いている。

「俺と一緒にキツズの魂ソウルに響くようなジングルベルを鳴らしてやるゾエ!」

「そ、そうだな!よし、ちよつと!ちよつと待ってるよ!」

そう言っていていそいと着替え始めるまじる。もうツッコむのも忘れるほど浮かれている。まじるは明らかに嬉しそうだ。

しばらくして着替えが終わった。

「よし!どうだ!これが本当のサンタってやつだ!」

まじるはバイト先のケーキ屋からサンタの衣装を貰っていた。ちなみに、このサンタの衣装はまじるが欲しいとおねだりしたものである。

「でも靴がなあ。いいのあったかなあ?」

「それなら大丈夫だYO!」

そう言って男がパチンツ!と指を鳴らすと、突然サンタらしいブーツが出現した。

「おお!すげえ!そしてかわいい!」

「これがサンタの力だYO!」

確かにこういうのを見せられると彼がサンタであると認めざるを得ないようだ。

「いくらサンタでも土足で人の家にかかるなんてことしちゃいけないんだZE!」

「いやいや、お前今モロ土足じゃねーか。」

「サンタの靴は地面から3ミリ宙に浮いているから裏が汚れないんだYO!それでも足音がするのは空気圧のせいなんだZE!」

「なんかどつかで聞いたような話だなおい。」

「あとさ、こういうサンタらしいグッズ出せるなら自分で身に付けるよな。」

ちなみに男の靴は赤と白のスニーカーである。

「お前名前は？」

「サンタだYOー！」

「じゃ、なくて名前。サンタにもそれぞれ名前があんだろ？」

「サンタクローズってのがそのまま名前なんだZEー！」

「あ、そうなのか。じゃあ……。ゲバラって呼ぶな。」

「なんでゲバラなんだYOー！」

「まずそれはこっちの台詞だ。なんでサンタがゲバラの服着てんだよ。」

「ヤツはとつてもクールだからだZEー！」

「あ、そう……。」

まじるは段々男の扱いに慣れてきたようだ。

「まあ、なんつつか、お前をそのままサンタと呼ぶと世界中の子供の夢をぶち壊しそうだし、何より俺の気が進まない。だからその服にちなんでゲバラ。文句あるか？」

「そんな名前で呼んでくれるならむしろ本望だZEー！」

「あ、そりゃよかったな。あ、そうそう、俺の名前はまじる。よろしくな。」

「OK！じゃあまじる、張り切っていこうZEー！」
そう言っつまじるの手を引くゲバラ。二人はするつと壁を抜け外に出る。

「カモン！」

ゲバラがそう言つと無人のバイクが空を飛んでやって来て二人を拾う。

「こいつが俺の愛車だZEー！」

「だからサンタならトナカイとソリ使えよ！」

まじるのツッコミも空しく、バイクは爆音を立てながら空を駆けていった。

「うるせー！」

「改造に結構こだわったんだYOー！」

「サンタが騒音撒き散らしてどうする！」

「どうせ町の人には聞こえないんだYO！」

「だったら無駄な改造すんなあ！」

こんな愉快なやりとりも町の人間には見えてないというのだから、もったいない話である。

「おじやましま〜す・・・。」

まじるは小声でそう言いながら、二人で壁を抜け部屋の中に入る。中ではまじるぐらい、もとい、小学生ぐらいの男の子が寝ていた。

「おい、それでプレゼントは？お前袋とか持ってないじゃんか。」

「それは今用意するんだYO！」

「しー！」

まじるは小声なのにゲバラはおかまいなしの大声。さすがである。ゲバラが両手の平に力を込めると、ポンツ！とプレゼントが出てきた。

「なるほど、それで袋いらすずなのか。でもなんかちょっと残念だな。」

まじるはどこまでもロマンチック思考である。

「ついでに靴下もいらなんだYO！」

「だからしー！」

「ここの子供は寝つきがよかったのか、一軒目はなんとかばれずにプレゼントを置くことができた。」

「あ、あとこれがどれだけ続くんか・・・。寿命縮むわ・・・。」

「最初の家でもう疲れるなんて先が思いやられるZE！」

「主にお前のせいじゃボケエ！先が思いやられるのはこっちだあ！」

ちなみにバイクの音はうるさすぎるのでまじるには聞こえないようにしてもらっている。ゲバラは残念がっていたようだ。

「ゲバラさあ、こんな調子でよく今までやってこれたな。相当多くの子供に姿見られたんじゃないかねえのか？」

「そんなことないZE！サンタをやって10年になるが姿を見られたのはお前が初めてなんだYO！」

「へへ、10年もやってんのか……。」

「……。」
「って実質10回しか仕事やったことないじゃないか！経験浅いなおい！」

一瞬数字トリックに騙されそうになったまじる。

『まあ、それでも俺よりサンタ歴長いのはさすが本職といったところか……。』

『そしてその10回をこいつがばれずに乗り切ってた、というのが疑わしくてならないな……。』

その後も非常に危なげな感じでプレゼントを配ってゆく二人。

それは、ある女の子の家でのこと。

「よし、ゲバラ、プレゼント用意。」

「OKだZE！」

「だからうつせえて！」

「う……ん……。」

「……！」

急に子供が声を上げながら寝返りをうつたため肝を冷やす二人。

「う……ん……。」

しかしすぐにまた寝付く。

「あ、あぶね……ほ、ほら、早くプレゼント置けよ。」

「わ、わかったZE。」

さすがに小声になるゲバラがプレゼントを置こうとする。

そのとき、ゲバラのリングが机の固い部分にあたりカッーン！

と想像以上にでかい、甲高い音が鳴り響いてしまった。

「ばっ！何やっ・・・！」

まじるが怒ろうとしたそのとき！子供がむくつと起きてしまった。

「！！！！！！！」

口を抑えながら懸命に身を屈め、必死に気配を消そうとする二人。
「……………」

女の子はしばらく、上半身をベットから起こした状態のままぼつと真正面を見つめていたが、そのうちゆっくり周りを見回しはじめ、ついにその視線が二人がいるほうに向けて落ちていって……

「HEY！」

そう言っつてゲバラが指を鳴らすと女の子は急にぱつと倒れて寝てしまった。

「な・・・何をしたんだ・・・？」

「俺の力で女の子を寝かせたんだYO！」

「あ、なるほど。そうか、じゃあ始めからこうできるんだったら起こしそうになっても別に問題なかったんだな。ていうか俺のときにもこうしていたらよかつたんじゃないのか？」

「これで何やっても向こう一年は起きないんだYO！」

「前言撤回だ！問題大アリじゃねえか！何で一年も効果続くんだよ！ちよつとは加減できないのかよ！」

「急だったからやりすぎたんだYO！」

「これ俺のときにやられてたらシャレにならんかったぞ！俺の人生がとんでもないことになるよこだったわ！」

「そのときはきつと一年後に謎の奇病から奇跡の回復を果たした少年として人気者になってただろうZE！」

「やかましいわボケ！ていうか解け！はやく起こしてやれよ！」

「でもそうしたら姿を見られてしまうZE！」

「起こした瞬間に外に出ればいいだろ！ほら、早く！」

「そう言っならやってみるZE!」

「いいか、いちにのさんだぞ。いち、にの、さん!」
パチンツ!

女の子は目を覚まし、キョロキョロと辺りを見回した。するとそこにはプレゼントが置かれていた・・・。

「ふう・・・最高にスリリングだったZE!」

「お前のせいだろうが!そんな指輪してるからだバカ!」

「つつかさ、サンタがクリスマスに髑髏身に付けんよ!不吉だろうが!」

「だってロックじゃないかYO!」

「何がロックだ!てかそれなら十字架にしるよ!つかなんで逆に十字架つけてないんだよ!」

「・・・おお!それは思いつかなかったZE!」

「お前ほんつとにバカだな!!!」

まじるのイライラはもう頂点に達している。

「あとさあ、よく考えてみりゃこんな必死になって泥棒みたいに姿隠さなくても、お前の力があれば姿を見えなくするのなんか造作もないんじゃないのか?」

「人生には常にスリルが必要なんだZE!」

「・・・。」

「え、えと・・・YO・・・。」

まじるに思いつきり睨まれ圧倒された結果、その後の家は姿を消して入ることになった。

だいぶ多くの家を回った頃、二人はある病院の前に行きついた。

「うゝん、こいつは困ったZE!」

「どうした、ゲバラ?」

ゲバラはある病室をじつと見ていた。

まじるがその部屋を覗くと、そこにはベットで眠る女性と、その傍らに座る女の子が見えた。

「もしかしてすでに起きてるから配れないとかそういうことか？」

「そうじゃない、あの子の望むものが問題なんだYO！」

「望むもの？」

「あの子の願いはプレゼントの代わりに母親の病気を治すことなんだYO！」

「あ、なるほど。でも、それってお前の力ならできるんじゃないのか？なんか反則的なぐらいに色々できるし。」

まじるは身も蓋もないことを言った。ファンタジー思考はどこへ消えた？

「たしかに治すこと自体はできるがそれじゃだめなんだYO！」

「何がだめなんだ？」

「サンタクローズは子供には信じてもらいたいけど、大人には決してその存在を知られてはいけないんだYO！」

「俺は子供にカウントされてんのかよ。」

しかしツツコミはスルーされた。

「実はプレゼントにはその子の親が見るとそれを自分たちで買ってきたと思ひ込むような仕掛けが施されているんだYO！」

「だからプレゼントの中身はその子の親が買いそうなもので、その子自身も欲しがっているようなものを選んでいるんだYO！」

「な、なんかすごい裏話だな。てかそこまでちゃんと考えられるとは思わなかった。」

ゲバラは基本的に適当に見えるが、サンタとしてすべきことはちゃんとしているようだ。

「心当たりもないのに突然プレゼントが来るという状態になったらだめなんだYO！あくまでも世の中の秩序を乱さないようにするのが俺たちサンタクローズの仕事なんだYO！」

「……。要するに、だ。整合性があつたら問題ないってことだ

な。
「
「What?」

「お母さん……。」
女の子は母親の寝顔をずっと見つめていた。
すると、急に部屋が薄暗くなった。

女の子は驚いて辺りを見回すと、そこには少女の見知らぬ一人の男が立っていた。

「やあ、こんばんは。」
彼はにこやかな表情で女の子に話しかけた。

その日付は12月24日、その時刻は夜、その男は赤い帽子に赤い服……。

そう、その男の格好は紛れもなく、
サンタクロースそのものだった。

「さ、サンタ……さん？」

女の子はその男を上から下に一度眺め、言った。

「……、小さいね。」

一瞬間が引きつるサンタ。

「ち、ち、ち、小さくても！サンタクロースだからね。」

その小さなサンタクロースは根性を見せ、笑顔で答えた。なんと
か踏みとどまったようだ。

「え、え〜っと、きみはういちゃん、だよね？」

「え？なんでういのお名前知ってるの？」

「だって俺、いや、ぼくはサンタクロースだからねー！」

「すごい！」

とりあえず掴みは成功した小さなサンタさん。

「ういちゃん。今年一年良い子でよく頑張ったね。偉い偉い！」
ほうびにサンタさんがプレゼントをあげよう。何がいいかい？」

するとういは顔を伏せていった。

「……。いらない。」

「いらないの？」

「プレゼントなんかいらない。だからお母さんを助けて。」

「お母さんね、病気になっちゃってずっと眠ったままなの。もうずっと起きてないの。だから起こしてあげたいの。また起きて一緒に遊んでもらうの。」

「……。ほんとにいらないのかい？」

「……。いらない。」

「なんだってプレゼントしてあげるよ？ういちゃんの欲しいおもちゃでも、ゲームでも、ペットでも、なんだったら」

「いらない!!!」

ういは大声で叫んだ。

「なんにもいらない。なんにもいらないから。おもちゃも、ゲームも、なんにもいらないから……だから……お母さんを治してあげて……。」

ういは大粒の涙を流しながら必死にそう訴えた。

小さなサンタは少し後悔した。

この子が本当に母親を助けたい気持ちが、プレゼントをチャラにしてまで母親を助けたいという気持ちがあるのかを試したことを。自分がやったことはただ、いたずらに少女の心を惑わせ、不安にさせただけなのではないかと。

しかし、こうでもしなければ彼もまた確信の持てない曖昧な気持ちのまま母親を治療することになっていた。それは彼自身の、正義感の揺らぎに繋がってしまうだろう。

きっと、後悔したことも含めて、彼が起こした行動は正しかったのだろう。

小さなサンタは自責の念を抑えつつ、優しい表情でういの頭を撫でた。

「……ごめんね、いじわるして。ういちゃんが本当にお母さん

が好きだつてことがよくわかったよ。」

「サンタ・・・さん？」

「よし！それじゃあぼくがついちゃんのお母さんを元気にしてあげよう！」

「ほんと！？ほんとに!？」

「ああ、だつてぼくはサンタクローヌだからね！」

そう言つて母親の傍まで寄る小さなサンタ。

小さなサンタがその両手を母親に翳す。

「さあ、治すぞ！」

若干大きな声でそう言う。すると、母親が急に光に包まれ始めた。

「わあ・・・」

ういはそう小さく声をあげて事の成り行きをじつと見守っていた。やがて光は収まり、小さなサンタは翳していた両手を戻した。

ういはすぐ母親の元に駆け寄つた。

「お母さん！お母さん！お母さん！」
すると、

「ん・・・、うん・・・。」

母親はゆつくりと目を覚ました。

「お母さん！！お母さん！！お母さん！！」

「うい・・・、ういなの？」

「おかあさん！！！！」

ういは号泣しながら母親にしがみついた。そして、その温もりを小さな体いっぱい感じていた。

「ごめんね。心配かけて、ごめんね。」

母親も目に涙をため、その喜びを噛み締めていた。

小さなサンタはその光景を見届けたあと、ナスコールを押し、窓の方へと歩いていった。

「あの、あなたは？」

「サンタさん！サンタさんだよ！」

「サンタさん・・・？」

母親は驚いた表情でその小さなサンタを見つめていた。

小さなサンタは窓の前で立ち止まり、振り返った。

「あなたの心にもジングルベルは響きましたか？メリークリスマス！
ス！」

そう言っつて小さなサンタはそのまま後ろ向きで窓から飛び降りた！
と、思えば、窓を出た瞬間小さなサンタはまるで煙のように消えてしまった。

啞然とする母親。笑顔で手を振るつい。部屋の明かりはいつのまにか元に戻っている。

「ういちゃ〜ん、どうしましたか〜？・・・！」

「や、山川さんが！先生！先生ー！」

「なかなかド派手なことしてくれるじゃないかYO！」

「いや、まああれなら多分辻褄が合うんじゃないかね。ほら、

夢オチ？的な。」

ゲバラもこれには呆れていた、

「だがかなりクールだったZE！俺もそついつの嫌いじゃないYO！」

「O！」

こともなかった。

終始演出の役しかなかったゲバラだが、どうやら満足しているようなので何よりである。

「念のために聞くが、あの母親眠らせたのはお前じゃないだろうな？」

「そんなことしてないYO！」

「さつきおもつくそしてただろうが。」

「あれは慌ててたからであのときしかやったことないYO！」

「そうか、ならいいけど・・・。」

まじるは、

『これもし母親が眠ってたのがこいつのせいなら、もう自演ってレベルじゃ済まされないよな……。』
と、内心冷や冷やしていた。

「じゃあ残りのプレゼントも配りに行こうZE!」

「おう!」

二人を乗せたバイクは、誰にも聞こえない轟音を立てながら空を駆けていった。

いや、もしかしたらその音は、心地よいジングルベルとなって人々の魂に響いていたのかも知れない。

「それにしても信じられない。」

「ええ、奇跡としか言いようがありません。」

医者と看護師は目を丸くしていた。

「私・・・夢を見たんですよ。」

「夢、ですか?」

「ええ、サンタクロース、それも、小さなサンタクロースが来てくれる夢です。」

「夢じゃないもん!ほんとに来てたもん!」

「ふふ、そうね。」

「じゃあもしかしたらその小さなサンタさんのお陰かも知れませんねえ。」

医者は非常に懐の深い人間だった。

「ふふ、そうかも知れませんね。」

「ほんとだよ!ほんとにサンタさんがお母さんを治してくれたんだよ!」

「じゃあサンタさんにお礼を言わなくちゃいけないね。」

看護師もそう言っつてういの頭を撫でながら微笑んだ。

「小さなサンタといえば、知ってますか？」

「ああ、あのケーキ屋のことか。毎年バイトしてる男の子。」

「はい、私も知ってます。そういえば、どことなくあの子に似てたような・・・？」

「それはまた。いやあ、ほんとに奇跡みたいな話ですなあ。」

「不思議な繋がり。こんなことって起きるんですね。」

「そっか、じゃあ来年はあそこでケーキ買おっか？今年お祝いできなかつた分、来年は楽しくやろうね、うい。」

「うん！」

親子はまだ一年も先のクリスマスに、早くも胸を躍らせていた。

「あ・・・頭いて。体いて。」

そこには、ひどい顔をしてぼっさばさの髪型のまま無様に布団の上をのたうちまわる元・小さなサンタがいた。

「時計も確認せずに寝たからな。昨日結局俺何時に帰ってこれたんだ？」

ちなみに現時刻は午後1時。

「ああああ・・・」

汚い声を上げながらやっとな体を起こすと、手に何かが触れた。

「これは、ゲバラの。」

そう、あのときゲバラが置いたプレゼントだ。

「え〜っと、なんだっけ？プレゼントの中身はその子の親が買いそうなもので、その子自身も欲しがっているようなものを選んでいる、だっけ？」

「じゃあ俺はどういうプレゼントになるんだ？」

まじるは包みを開けた。

開けた瞬間止まった。

「確かに、確かにうちの親が買いそうなもので、俺も欲しがると

うなものだ。ああ、間違いない。」

「だが、だが。」

「来年アイツに会ったら・・・殺す！」

中に入っていたのは、

みんなを見返せ！これでアナタも背が伸びる！

という本だった。

M e r r y C h r i s t m a s

(後書き)

え、前書きは見え透いたミスリードでしたw

私には人を感動させられるような作品が書けないので終始ギャグテイストに徹してみましたがいかがでしたか？

仕上げたのが24日ギリギリだったこともありディテールがあまりちゃんと作り込められなかったのが残念です。なんせ文字数が伝説の勇者(笑) 全編とほぼ同数だったくらいなもんで。

この作品を読んで少しでも面白いと思って頂ければ幸いです。

あとクリスマスにいちやつくカップルばくはて(ry

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6700p/>

魂（ソウル）に響くジングルベル

2010年12月31日08時23分発行